静岡発 こう読む

ことばと身ぶり

▶▶▶加藤裕治

現在上映中の、S・スピルバーグ監督の自伝的映画とも言われる「フェイブルマンズ」は、映画撮影に引き込まれる主人公の青年とその家族を描いた作品だ。私が興味を持ったのは、この映画が身ぶりとことばの関係を描いている点だ。

主人公の青年は、自分の母親を撮影するなかで、そのフィルムに写った母親の姿から、ある秘密について確信に近い疑いを持つ。映画では、その疑いについて、ついに母親が真実を語ろうとするシーンがある。だがこの時、母親はことばがうまく出ず、息は激しくなり、慟哭してしまう。人の身ぶりから、決定的な真実はわからない。しかし、身体は語ろうとすることばの内容と深く結びつき、何かを伝える。

W・J・オング著「声の文化と文字の文化」（藤原書店）は、ことばと身体の関わりを論じている。例えば話しことばは、「話す」「聞く」という一対の身ぶりから成り立っている。また私たちは、懸命に何かを伝えようとする際には、ジェスチャーも交えて声を出す。このようにことばは常に身ぶりや身体と関わっている。

ただし、誤解が無いようにしたいが、これはことばの内容を軽んじることではない。むしろ逆で、ことばの内容をきちんと伝えたいとき、多くの人の身ぶりは大抵、誠実できちんとしている。しかし、ことばの内容が空虚であったり、ごまかそうとするとき、人をばかにするような態度をとり、はぐらかし、威圧的に振る舞い、場合によってはきちんと答えることさえ拒否する。

このことを示す例が、チャップリンの映画「独裁者」だろう。独裁者ヒンケルは、全く内容のない演説を威圧的な身ぶりで行う。一方、主人公の理容師が平和について語るラストシーンは、落ち着き、誠実で、しかし情熱を持った態度で行われる。

政治の世界を見ていると、画面越しではあるが、あからさまに身ぶりの不遜さを前面に出す人がいる。確かにことばは内容が重要だ。しかしそれを語る身ぶりもまた、私たちに何かを伝える。

（静岡文化芸術大教授）

2023年3月26日
中日新聞（朝刊）p.5